
リトルスター

notomo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルスター

【Nコード】

N70650

【作者名】

notomo

【あらすじ】

ちびわんこの、命の旅。人間も、動物も、同じ、大切な生命。それを伝えたくて、人間ではないわんこの目線からのストーリーを描きました。

（前書き）

俺は、川で生まれた。やさしい川の流れーお母さんからはぐれて
しまって、おれ、どうなっちやうの？

「リトルスター」

「昔は、野良犬が多くて恐かったわねえ。」

「ほんとほんと、最近は見ないわねえ。」

人間の、しかも「おばさん」と呼ばれる種族は、ほんとによくしゃべる。自分の若かりし頃の自慢話、思い出話、ご近所のうわさ話と、話題がつきるといことがないようだ。

普段は、そんなおしゃべりを聞いている暇はないんだけど、今日はたまたま聞いてしまった。

だって、「自分」が話題に上っていたから。

俺、泳ぎが得意なんだ。川の上で生まれたんだから。川が、俺のお母さん。優しい流れで、赤ん坊の俺をあやしてくれた。小さな箱にはいつていたから、生まれながらにマイホームだってあったんだ。しかも、ミルク付き。だから、ちっとも寂しくなかった。

でも、大雨が降ったとき、俺、お母さんとはぐれちゃった。お母さんの腕から飛び出してしまうて、マイホームと一緒に流れちゃった。泳ぎ方は、お母さんと暮らしていたから、無意識に習得していたんだと思う。ともかくも、一才の冬、初めて陸に上がったってわけ。

もちろん、お母さんのところに戻りたかった。でも、体のそこら中がいたくていたくて、とても泳げそうになかった。マイホームも流されちゃって、途方に暮れていたとき、

「わんわん、おいで、おいで」

と言う声が聞こえた。黄色い帽子の女の子だった。

「あたし、ひなつていうの。わんわんは？首輪ないね」

首輪？なんだそりゃ？聞いたこともないから、もってるはずないじゃねえか、

「わんわん、お家、ないの？」

ほつといてくれよ、前はあつたんだよ。おれは、つんとそつぽを向いた。

「お名前、ひながつけてあげる。背中に小さい星があるからー、うーん、かっこいい名前がいいよねえ。」

ナマエ？こいつは、わけのわかんないことばかりいうやつだ。でも、そいつの瞳が、きらきらしてて、おれは、気に入っちゃったんだ。

「いっしょにいてやつても、いいかな。」

おれは、そう思うようになった。しっぽも、ふってやった。寂しかったからじゃ、ないぜ。

「うーん、そうだ、英会話で習った英語のお名前にしよう！あなたは、リトルスターよ。」

おれが首を傾げていると。

「私は、ひな。あなたは、リトルスター。みんな、お名前を持ってるのよ。」

こいつ、おれの思ってることがわかるのか？そんなわけないか。でも、「ひな」のおかげで、おれも、みんなが持つてるナマエとやらがついたわけだ。これで、おれも一人前さ。

「ママに、飼ってもいいか聞いてみる。リトルスター、いい子でいてね。」

カウ？また。わけわかんねえこといつてるけど、おれは、ひなが気に入ったから。しばらくそこでひなの帰りを待つことにした。

それにしても、てめえの背中なんか、みることできねえから、おれが星を持つてるなんて知らなかった。背中に、空を写してるなんて、おれってかっこいい！

ひな、はやくこねえかな、おれ、ひなに泳ぎ教えてやりたかった。おれも、ひなに色々おそわったからな。待っても、待っても、ひなは戻ってこなかった。代わりに、細い棒みたいなものを持った、でかいやつが、二人、やってきた。なんだ、こいつら？

「よしよし、いいこだな。これ、食うか？」

うまそうなにおいがする。でも、おれは、ひなを待つてるんだ。ナマエをくれたやつを、裏切るようなことはしねえ。

おれが、その場でじっとしていると、もう一人の男が、
「めんどくせえ、まだちびだ、ふたりでおさえこめ！」

おれは、二人の男の手によって、暗いところに押し込められた。わけがわからねえ。おれは、待つてるやつがいるんだよ！」

地面が、がたがたゆれた。どうやら、動いているらしい。なんてこった！

「ちびでも、野生化したら面倒なことになるからな。」

「小さいうちの方が、楽にいけるさ」

大きい奴らが、この地面を動かしているみたいだった。

「早く教えてもらえてよかったよ、でも、バカ正直なちびだなあ。人間の言葉がわかってるのかねえ？」

教えてもらった？おれのことを知ってるのは、ひなだけだろ？ひなが、この大きい奴らと呼んだのか？どうして？これが、カウつてことか？じゃあ、なんでひながこないんだよ。人間は、分けわからねえよ！

やっと、地面の動きが止まった。おれは、大きい奴らの片方に押さえ込まれる形で、また、狭いところに入れられた。

「おわ、なかまだらけじゃねえか！」

おれは、自分以外のこんなにたくさんの犬を見たのは初めてだったもんで、ついはいじまった。

「おれ、背中に星があるんだぜ。」

みんなに向けて背中を見せたが、だれも、なんにもいやしねえ。

「おい、みんな、元気ねえな。腹、へってるのか？」

「おまえさんも、そのうちわかるよ。」

小さな声で、年寄りの犬が言った。おれには、何のことだかわからなかったが、その夜は、久々に、あたたかいところで眠った。しかも、仲間と一緒にだ。そのときはまだ、ここでみんなと暮らすのもわるかねえな、なんて思っていた。ただ、「ひな」のことが、気

がかりだった

翌日、大きい奴らがまたやってきた

「飯だぞ。」

なかなかうまそうじゃねえか。おれは、腹一杯、食べた。でも、ほかのみんなは、あんまり食べていなかった。ここのやつらは、元気がなさすぎるぜ。

飯が終わると、大きい奴らが、仲間のうちの三匹をどこかに連れて行こうとする。三匹が悲しそうな泣き声を上げながら、ひきずられていく。

「あいつら、どこにいくんだ？」

おれは、昨日のじいさんに尋ねた

「殺されにいくのさ」

「コロサレルってなんだ？」

「お前さんは、まだちいさいから、分からんじやろうが、二度と動けないようにされて、ゴミと一緒に捨てられるってことさ。二度と動けなくなることを、死というようじゃのう」

シ？大きい奴らに、そんなことする権利、あるのかよ？じゃあ、

おれも動けなくされるのか？カウは、シなのか？

おれは、あまりのことに、頭がグラングランして、そのひは、ばったり寝込んでしまった。

翌日、昨日の通り、でかいやつが飯を盛ってきた。おれは、意地でも食うかと思っていたのに、空腹に負けて、食ってしまった。そんな自分が、情けなかった。背中の星も、もう消えちまつてるんじゃないかと思った。

「ちび、こい」

おれは、また大きいやつに押さえ込まれた。おれ、コロされる、もう泳げなくされちまう、シだ、こわい！

おれは、ぎゃんぎゃんほえたけど、でかい奴らの力には、かなわなかった。

「このこは、どうでしょう？」

「このこ、かわいい！星があるよ、お母さん、このこがいいよお。」

ひなに似た声だ

でも、ひなじゃない。

「このこ、飼うー」

おれは、もうカワレルなんてごめんだ。コロされるじゃねえか。おれは、ぎゃんぎゃんほえることしかできなかった。

「もつと、ひとなつこいこのほうがいいんじゃないの？」

ひなにたのの親らしいのが、言う。

「いや、このこがいい！さき、この子と仲良くなれそうな気がするんだもん！」

「しつかり面倒見るのよ」

大きい奴らが、おれを、「さき」というナマエの奴に渡した。

「これから、仲良くなろうね。」

おれは、もう何もかもがどうでもよかった

どうせ、おれは、二度と動けなくなって、ゴミと一緒に捨てられるんだ

また、狭いところに入れられて、がたがた地面だ。前とおんなじ。おれは、吠える元気もなくなっていた。

下ろされたところに、仲間はいなかった。おれ、一人か？

「お風呂、入ろうねー」

さきに、ふろとやらに連れて行かれた。はつきり言って、悪くなかった。水はお母ちゃんを思い出させてくれるし、しかも、あたたかで、さきが優しく毛をなでてくれるのも、気持ちよかった。

「星も、ピカピカだよー。」

おれは、背中の中を思い出して、誇らしくなるのと同時に、「ひな」を、思い出していた。

さきのカウは、前と、全然違った。毎日なでてくれて、おいしいご飯。俺専用のトイレまであって、そこで用を足すと、さきはもちろん、さきの親も、おれをほめまくった。こんなこと、簡単さ。

「四人家族になって、うれしいねえ。」

さきがいった。

「そうね、お母さんも、こんなかわいい子がきてくれて、毎日楽しくって。」

「おとうさんも、早く会いたくて、飲みに行く回数が減ったよ。」
「どうやら、さきと、親と、おれとで、「カゾクっていうらしい。」

ことははわからなくても、そのあたたかさが、おれはうれしかった。
仲間になれたって、感じたんだ。

「今日は、お友達を連れてくるからね。」

さきの、仲間か。さきは、すごくいいやつだから、きっとその仲間もいい奴だな。おれは、すごく楽しみにしていた。

数時間後、

「ただいま。」

いつものさきの声。

「おじやましーす。」

この声は・・・

おれは、あの恐ろしい体験を思い出した。恐ろしい「カウ」を。
ひなだったのだ。

「さいきん、うちにきたわんこだよー。まだ、ちゃんとお名前は決まってるんだけどね、すっかり家の家族だよー。みんな名前、迷ってるんだよねー。」

さきが、おれをだきながら、はしゃぐ。ひなのところに、連れて行かれる！こわい！

ひなは、少し大きくなっていた。でも、目は相変わらずキラキラで大きい。その瞳から、涙が、あふれだした。おれを見るなりだ。泣きたいのは、こっちだ。おれ、こわかったんだぞ。

「リトルスター、ごめんね。ママが、保健所に電話しちゃったの。野良犬は、あぶないって。ごめんね、ごめんね。」

さきは、ぼかんとしている。

ひなが、おそろおそろおれに手を伸ばす。まだ、涙が大きな瞳か

らあふれている。

おれは、お前のせいで、大変な目に遭った、こわい思いもたくさんした、動けなくなつて、ゴミになつちやうところだったんだぞ。でも、でも、ひなのなみだをみていると、そのてをなめずにはいられなかった。ひなは、こえをあげて、泣き出した。おれを抱きしめながら。

さきも、ひなから話を聞いて、少し泣いていた。

「絶対に、リトルスターを大事にするからね。」

さきは、おれを抱きしめた。おれのナマエ、が、帰ってきた。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7065o/>

リトルスター

2010年11月4日09時35分発行